

の開拓地を探して移転するか等の話も出たが、組合員は一同こぞって行くならどこでも行く、別れ別れになるなら絶対動かないとの結論だった。また、この菅生沼で頑張る決意を固めた。

収穫目前にして大水で三回も流され、秋から皆無の年を過ぎ、二十七年、作った水田から初めて収穫を得た時の組合員の喜びようは想像以上だった。これで一年間食う心配から解放され、肩の荷がどっと降りた感じだった。

最初から組合の人間はこうあるべきと指導されてきた魂が染みついて、個人が困ったことが出来ても部落皆で処理する

開拓五十周年にあたって

記憶を四十年前にタイムスリップする。

全員がテーブルに付き食事がはじまる夕食は、すいとんとサツマイモが二本。昼の弁当は外米で、石油臭く冷めるとポロポロして箸につかまらない。おかずは納豆の味噌練とたくあん。たまに目ざしが二本あるだけ。卵焼きといえ、卵一個を粉で薄めたもの。

だが、このへんの農家の人達も米や麦半々を食べて贅沢はしていなかった。でも子供ながらに白米と生卵が食べたかった。

のが当然のように思ってきた。私も二年前に火災を出し、丸焼になる災害にあったが、ほとんど不自由を感じることもなく過ぎさして貰った。この体制こそ生前の佐藤組合長が育ててきた共同精神の賜物だったんだなあと改めて敬服せざるを得なかった。せめて組合長も現在まで生きていて欲しかったと痛切に思っている。

五、六年前までは私どもがここまでなるとは夢にも思わなかった。末ながく私どもの行方を見守っていてくれと願いにも喜びあいたい。

鈴木敏一

そして、学校から帰ると牛の放牧と飼料与えが日課であった。

中学三年生の頃、個人経営になった。

昭和三十年に堤防ができて喜んでいたが、三十三年には相変わらず水害に見舞われた。続いてその翌年も利根川堤防の溢流堤が決壊した大災害があった。

明日から稲刈りをすると思っていたら、水が入り、朝起きて見ると一面が湖のようになる。三日から一週間稲が水につき、引くのを待って胸までつかって稲穂を木クキで寝ずに

洗う。水につかった米を炊くと半分腐った匂いがして、それを一年間食べた。

経営圧迫のため、ますます生活が苦しくなり農業高校を一年で退学した。

帰ってきて間もなく、木の崎の土地買収の話がもちあがる。組合執行部の努力がみのり買収も終わり、水田造成工事をして配分になった。一戸当たり一町二反から八反歩の配分により二町歩を耕作、夢もふくらんだ。その頃より経営も安定し、生活にゆとりが出来てきた。

その後ライスセンター計画の話が持ち上がりスムーズに決まり、工事も順調に進む。実際にコンバイン刈取り作業が始

開拓五十年を顧みて

大八洲丸が共に拓き共に築く大漁旗を上げて菅生町浅間山港を出港したのは五十年前。船はボロだが理想は高き開拓精神。佐藤組合長を中心に組合員一同信じ合い、先々幾多の苦難にも遭ったが堪え忍び、安住の港を求めて挫折せず来られたのは、共同生活の力だと思えます。

幾多の水害、何カ月の苦労が水泡となり、海のような圃場を見た時、無情な天をしみじみと恨んだ。時には挫折時には希望を失いかけたこともしばしばあった。その都度励まし導

まると、やはり大型機械は基盤整備がしていないため無理があった。

基盤整備計画があったがいろいろ問題があり、完成したのは佐藤組合長が亡くなって十三年後に完成の日の目を見る。

五十年代に入りますます国際化になり、農産物の自由化、とくに米の自由化、二千年には完全な米の自由化になり、政府買上げ米は二百万トン止まりで、それ以上は個人の自由販売になるようで、農家および組合は重大な時期に入り、ますますの経営努力が必要である。

最後に第一世の方々には五十年間の御苦勞に対し心から感謝いたします。

庄司利男

いていただいた組合長さんに只々頭の下がる思いです。

秋には五十周年、大八洲丸は只今一生懸命航行中です。開拓は名実ともに成長しました。しかし、最近農業経営も農産物の海外からの輸入自由化により極めて厳しいものがあります。先輩が築き上げた大八洲開拓丸の舵をしっかりと握り、進路をあやまらずに焦らず急がず開拓百年に向かって新しい船出といたしましょう。

壮なる二世若き三世の皆さん、この難関を乗り越えられんこ